

上爲之於浴池、置石釜而瀉注矣、寛永二年春三月十八日沸湯又竭焉、久之始達矣、貞享二年冬十月十日亦竭焉、數日之後如故也、寶永四年冬十月十四日大震、塞泉源、竭枯者數日、大龍侯命祈于湯神社、明年閏正月廿八日忽有一老來云、明旦泉如故也、至期果達焉、夏四月朔日、始許縱浴、浴者彭々々暮一千八百餘人云、

海嘯

〔松屋筆記 六十二〕高潮、地震、津波、

渡邊轅云、海の津波も海中の地震にや、さまでの風ならでも、大浪打よするは、必水動にて、海地震ともいふべくやと云々、これもことわりにきこゆ、

〔續日本紀 聖武 十五〕天平十六年五月庚戌、肥後國雷雨地震、八代、天草、葦北三郡官舎、并田二百九十餘町、民家四百七十餘區、人千五百二十餘口、被水漂沒、山崩二百八十餘所、壓死人四十餘人、並加賑恤、

〔三代實錄 清和 十六〕貞觀十一年五月廿六日癸未、陸奥國大地震動、○中 海口哮吼、聲似雷霆、濤涌潮湧、洞漲長、忽至城下、去海數千百里、浩々不辨其涯、淡原野道路總爲滄溟、乘船不遑、登山難及、溺死者千計、資産苗稼、殆無子遺焉、

〔三代實錄 光孝 五十〕仁和三三年七月卅日辛丑、申時地大震動、○中 五畿内七道諸國同日大震、官舎多損、海潮漲陸、溺死者不可勝計、其中攝津國尤甚、夜中東西有聲、如雷者二、

〔南方紀傳 下〕應永十四年十二月十四日、大潮入、大地震、

〔異本年代記 拔萃〕明應七年八月廿五日、辰刻、大地震、其程良久、從其相續、月日地搖、此時伊勢國大湊悉滅、却其外三川、紀伊諸國之浦津、高鹽充滿而滅亡云々、

〔窻の須佐美 三〕元祿十六年癸未十一月十八日、四ッ谷鹽町より焼出て、芝海端まで焼しかば、人々騒しに、廿二日丑刻、大地震、御堀石壁の石一同に拔出て、齒ぐきのごとくになりぬ、御城詰の面々、御門番人之外、江戸中貴賤歿死、怪我人かぞへ盡すべからず、この時房州總州の津浪夥敷して、死